



「おだこうで出会い、小田地域と学ぶ。小田校生の青春——」

特集 のぞいてみよう  
**おだこう  
アオハル  
地域未来**

Special Feature UCHIKO HIGH SCHOOL ODA BRANCH

小田高等学校は令和2年4月から内子高等学校小田分校（以下、小田分校）になりました。分校化による変化はありますが、町外や県外からの生徒が増えるなどの効果もありました。生徒たちはさまざまな考えに触れることで、視野が広がっています。新しい寮もでき、地域と生徒の関わりもより深くなりました。分校になっても学校の関係者や地域の人々が「子どもたちの笑顔と未来を守りたい」と頑張っています。写真は今年入学した1年生です。今の小田分校の魅力を見てほしいと笑顔で手を振っています。皆さんも少しのぞいてみませんか。



1\_ コロナ禍で中止になった「燈籠まつり」を、小規模でも開催できるよう生徒たちが企画。地域の人と一緒に盛り上がった 2\_ 小田小学校との交流授業。小田の魅力を小学生に語る 3\_ みんなが主役の運動会 4\_ 小田分校の魅力を生徒たちが全国にPR 5\_ 親身になって教えてくれる先生

分校になっても変わらない面白い学びや生徒の笑顔

校舎から聞こえてくる、生徒たちの楽しそうな笑い声——。教室では10人ほどの生徒たちが仲良く机を並べ、先生が生徒に話しかけながら、こやかに授業を進めていました。都会からここに来たという生徒は「少人数だから先生との距離も近くて話しやすい。都会の学校にはない良さ」と笑います。

現在、小田分校の全生徒は72人。小田高校から引き継がれた、起業家教育プログラムを充実させました。外部講師を招き、新しい時代で活躍するために必要な能力を育むなど、特色のある授業を実施。コロナ禍の3年間はオンラインで全国や世界から講師を招くなど、生徒たちの視野は広がっています。分校になっても、田舎の小さな学校だからこそできる面白い学びは変わっていません。

大きく変わったのは、かつては地元の子がほとんどでしたが、今は半分以上が町外から来た生徒だということです。さまざまな仲間と出会うことで、多様な価値観を知り、互いに刺激を与え合い、成長していきます。地域の人たちとの関わりも増え、生徒たちにも地域にも、いい循環が生まれています。

# おだこうに響く にぎやかな笑い声

分校にはなりませんが、面白い学びや地域との関わりは以前のままです。この小さな学校で、精一杯学び学校生活を送る生徒たちの表情は輝いています。



小田分校のゆるキャラ「おだまる」▶

## Interview



小田分校教育魅力化  
コーディネーター  
のぞみ  
小田原 希実さん

## 地域の皆さんと学び、成長する子どもたち

4年前に内子町の地域おこし協力隊として着任し、今は小田分校の教育魅力化コーディネーターとして、教育プログラムの立案や生徒受け入れ体制の整備などを行っています。そんな中で感じているのは、小田地域の人々の温かさは、かけがえないものだということです。最初は、町外や県外から来た生徒たちに対して地域の人たちがどう思っているのか分からず不安でしたが、心配いりませんでした。「小田を選んで来てくれてうれしい」「何かしたい」と、おばちゃん食堂の取り組みを始めたり、小田校生のために募金を集めたりなど、優しい人ばかり。「小田の

子ども、外から来た子ども小田の子」と、地域の仲間として温かく接してくれる、どこにもまねできない素晴らしいまちです。

地域の人々の思いに触れて、生徒たちも成長しています。小田分校や地域の良さを知ってほしいと、PR活動に励んでいる子もいます。後輩にも勧めたいと、母校に学校パンフレットを持って行く子ども——。親元を離れて住むには不便な土地ですが、そんな生徒や地域の皆さんの姿を見ているから、自信を持って「来てみませんか」と言えます。「地域に恩返しをしたい」。そんな思いを育める小田分校を、私も一緒に守っていきたくです。

広報うちこ 2019. 12月号 特集

守りたいのは、「ハコ」だけじゃない。

小田分校になったときに特集した号です。地域と学校がともにある意義をテーマにした特集。地域と関わり合いながら学び成長する生徒たちの姿などを紹介しています。ぜひ読んでみてください。

QRコードをスキャンすると簡単に見られます▼



私たちも小田分校生を  
応援したい、一緒に楽しみたい！



高本 匡介さん  
和太鼓集団 喜鼓里

### 小田校生はみんな小田っ子

7月29日開催の燈籠まつりに向けて、太鼓を生徒たちに教えています。みんな初心者ですが一生懸命に取り組む姿を見ると、毎日でも教えたくります。地域の祭りに関わりたいたいという高校生の声がとてうれしかった。学校と地域が一緒になってたくさんの小田っ子を育てていきたいです。



山本 昌徳さん  
JAえひめ中央南部管  
農支援センター小田分室

### 母校と先生に恩返し

小田校生に農業の楽しさを知ってもらおうと、ピーマンと一緒に育てています。小田分校は僕の母校。恩師の「小田でしかできない体験をさせてあげたい」という思いに、農業体験なら僕にもできると提案しました。先生や地域に大事にもらったので、今度は僕が力になる番。小田の魅力を伝えられたらうれしいです。



新しくできた小田寮の集会室で。ご飯を食べたり、勉強したりと寮生が集まる憩いの場



大きなオムライス「おいしそう〜」と、にっこり

# 「ありがとう」

高校生の声が聞こえるだけでうれしい

授業や祭りなど、小田校生と交流する機会が多い地域の人たち。「何かしてあげたい」と思う人たちもいて、交流の機会が増えています。「小田校生との関わりが楽しみ」「やりたいことを全力で応援したい」——地域の人たちの話からは、小田校生を思う優しさや温かさが伝わってきます。



おばちゃん食堂 代表  
西岡 千代子さん

### 感謝の気持ちを込めて 愛情いっぱいの手料理を

「おばちゃん食堂」は親元を離れ小田寮で生活する生徒たちに、小田の手料理を食べさせてあげたいという思いから生まれました。毎月第2・第4土曜日に夕食を振る舞っています。活動を始めたのは2年前。コロナ禍で帰省できない生徒がいること、週末は寮の食事が出ないこと

を知ったからです。見ず知らずの土地に決断して来てくれた子どもたちの思い、送り出す親の思いを考えると、地域でも大事にしたいと思います。  
寮生の「おいしい」と食べてくれる笑顔がうれしくて、私たちもやりがいを感じています。小田うどんを作ったときには、湯がくのが間に合わないくらい喜んで食べてくれたんですよ。せっかく来てくれたんだから、3年間小田で過ごせてよかったと感じてほしい。メンバー全員が「小田に来てくれてありがとう」という思いを持っています。小田のみんなも同じ気持ちだと思えます。生徒たちの笑顔が一つでも増えるよう、これからも仲間たちと続けていきます。

### 勇気から始まった寮生活 舎監みんなで見守りたい

2年ほど前から小田寮の舎監をしています。私は神奈川県出身で、仕事のために東京に住みましたが、合わなくて小田にきました。だから寮生みんなが勇気を出して親元を離れ、ここにいる大変さが少し分かります。年は何歳も下だけど、尊敬する気持ちです。途中で寮を離れる子

もいるけれど、挑戦した一歩はとて大きなこと——。決して無駄ではないと伝えたいです。  
小田寮の良さは先生だけでなく、地元住民の舎監が8人もいること。いろいろなタイプの人がいるので、それぞれの寮生に合った見守りができています。お節介のしすぎもよくないのですが、舎監が交代で書いている日誌を見ると、体調や表情の変化などを気遣う言葉が書かれていて、寮生への愛情が伝わってきます。地域の人たちも普段は控えめですが、「力を貸してほしい」と言うので全力で助けてくれるはず。安心して、小田でしかできない経験をたくさんしてほしいです。みんなの成長する姿を舎監全員で見守ります。



朝食の風景



新設された小田寮と点呼や記録の様子



地元住民の舎監の皆さん



メンバーは全員で14人。この日は5人で活動



喜ぶ顔が見たいから、メニューもいろいろ



おばちゃんたちと一緒にもち餅を作る

個性豊かな仲間たちと出会える小田分校。ここでの出会いを通して、生徒たちの心にはどんな変化があったのでしょうか。ずっと地元で過ごしてきた生徒や県外から来た生徒など、小田分校で青春真っ只中の4人に思いを聞きました。

新しい友達 × 先生 × 地域 小田校生のアオハル

# おだこうで出会えてよかった

みんなにも知ってほしい

自分を変えられたおだこう



いつかまた戻ってきたい

思い出いっぱいのおだこうへ



友達と出会い、もっと好きに

ずっと小田が好き



世界が広がった

東京にいたときよりも



柿沼 璃杏さん(2年生) = 東京 =

私が住んでいた東京の中学校は、1学年に200人もいました。先生も一人一人を見る余裕がなく、質問すると「授業聞いてなかったの?」と言われたこともあります。大きな学校は私にとって窮屈で、悩みも増え、どんどんネガティブになっていました。

でも小田分校に来て、そんな自分を変えることができました。みんな気さくで話しやすく、いつの間にか心から笑えるようになれました。先生も親身になって悩みや進路のことを聞いてくれます。先生のおかげで、私も「生徒の心に寄り添える先生になりたい」という夢を持つようになりました。みんなで頑張ろうという雰囲気、先生たちも夜遅くまで勉強を見てくれます。勉強は得意ではありませんが、頑張っ

て大学を目指そうと意欲がわいてきます。一からのスタートでしたが、ここへ来て良かったです。昔の私と同じような思いをしている子がいたら、小田分校を勧めたいです。この学校の良さが多くの人に届くように、私自身が高校生活を一生懸命に楽しもうと思います。

城戸 花さん(3年生) = 村前 =

部活動を引退し、希望進路も決まったので、先輩たちが作った「キッチンカー」を復活させる活動を始めました。かつての小田校生が、学校を存続させたいという思いで企画したのだと先生に聞きました。地域の人たちがとても喜んでいただいていることも知り、すてきなと思いました。

私は寮で地域の皆さんにお世話になっています。小田のお父さん・お母さんみたいに優しいです。皆さんへの感謝の気持ちは、元気いっぱいのあいさつに込めるくらいしかできていませんでしたが、学校や地域を大切に思う気持ちをキッチンカーで伝えられたらいいと思います。

中学生の頃からスクールカウンセラーになる夢があり、小田分校に来てその思いがより強くなっています。弱い部分を克服して、だんだんと自分を変えていく同級生もすごいし、先生や地域の皆さんの姿からもたくさんのことを学びました。すてきなことが詰まった小田分校にずっと続いてほしいし、私もいつか夢をかなえて、またここに戻ってきたいです。

永居 己育さん(2年生) = 森 =

僕は幼い頃から剣道をしていて、地域の人たちがずっと応援や指導してくれています。今も部活動帰りにあいさつをすると、「お帰り」「頑張れよ」と返してくれます。そんな皆さんに恩返しをしたいと、部活動や学校生活を一生懸命に頑張っています。

小田分校と小田地域の未来はつながっている気がして、地元出身の僕らが積極的に小田分校を盛り上げなければと考えています。生徒会にも立候補しました。学校の魅力を上手に発信するために、地域の人や新しい友達に刺激を受けながら、いろいろな視点で物事を見られるようにしたいです。

小田分校では生まれて初めてクラス替えのドキドキを味わえました。地元の子はもちろん、県外から来てくれたみんなに感謝です。特に寮生は親元を離れて暮らし、自立しているので尊敬しています。自分の町を都会の子たちが楽しむ姿も見られて、小田をもっと好きになることができました。卒業したらきっと離ればなれになるけれど、ここでの出会いに感謝して、一日一日を大切にしたいと思います。

高野 慎之介さん(2年生) = 東京 =

地域づくりの仕事をしている父が、「東京以外にも選択肢はある」と小田分校を勧めてくれました。プロジェクト学習など、地域と連携して進める活動がとても魅力的に感じ、小田分校に進学しました。

来てみて感じたのは、環境の違いです。窓の外を見たら一面の山。星がきれいで冬はオリオン座がくっきりと見えて本当に感動しました。活躍できる場も多いです。東京ではたくさんの生徒の前で失敗するのが怖かったけれど、今は少数。失敗しても大丈夫と、積極的に挑戦できています。運動会は出番がありません。「えっ、もう俺の番?」みたいな感じで、その分思い出もたくさんできました。

小田分校の学びは楽しくて、視野を広げてくれた父に感謝です。昨年は同級生が「屋上ランチ」を企画して、先生たちの協力で実現しました。自分ももっと学校生活を楽しめるよう新しい企画を考案中です。田んぼのイベントや燈籠まつりなど、地域の人たちとの活動も楽しみ。たくさん経験して、将来は地域づくりについて学べる大学に進みたいです。

# おだこうで過ごしたアオハルの先に

小田分校の先輩、先生、そして地域の人々——。生徒たちが小田で過ごす3年間を、みんなが大切にしようと思っています。そんな思いと小田分校の今が、生徒たちの未来にもつながっています。小田分校の卒業生で初の県外生だった川倉さんに話を聞きました。

「小田の皆さん、ありがとうございます。小田分校での3年間を振り返ると、そんな気持ちがあふれます。僕は中学生の頃、家族には話せるのに、なぜか学校に行くのが怖くて、中3の頃は学校に行けなくなっていました。そんな自分を変えようと思ったのが小田分校です。初めての県外生で、舎監さんや先生には苦勞をおかけしたかと思えます。新型コロナウイルスが発生したのも、僕が入学してすぐのことでした。来たばかりの不安と孤独感で、「もうやめよう」と何度も思いましたが、そのたびに担任の黒木吾緒先生が「自分を変えよう」と小田に来たんだから、一緒に変えていこう」と熱心に引き留めてくれました。学校が再開するまで、個人授業をしてくれ

たり、テニスの相手をしてくれたり、先生のおかげで学校に行きやすくなりました。先輩や同級生にも感謝です。全然しゃべれない僕の言葉を気長に待ってくれたので、徐々に自分の殻から出て話せるようになりました。友達もでき、思い出もいっぱい——。みんなと自転車で隣町まで走ったこと、負け続けたソフトテニス部で最後にいい試合ができたこと、同級生4人とけんかしながら出場した運動会のムカデ競争のこと。楽しくて、3年生の最後の方はずっと笑っていました。中学校のときは、笑いあったりけんかしたりする友達もいなかった。周りに関わることなく、ただ学校に行つて帰るだけの毎日でした。みんなと出会えたから、自分を変えることがで

き、今の自分があります。今、大学で地域課題の解決方法などを学んでいます。将来は小田のようなすてきな地域を守る仕事をしたいと思っています。皆さんに支えられた3年間は、自分の未来を変える3年間でした。小田分校じゃなかったら高校にも行っていないかもしれませぬ。小田は僕にとって第2のふるさと。思い出と感謝の気持ちを胸に、大学での新しい学校生活も頑張ります。



小田分校4年度卒業  
ひろゆき  
川倉 大征さん



これから小田分校は子どもたちの未来を応援

取材した皆さんからは「ありがとう」という言葉があふれます。誰かとのつながりなしには生まれてこない言葉で、小田は人との関わりを大事にする温かな地域だということが伝わってきました。

「小田分校に来て変わった」と話す生徒もたくさんいます。好きな自分を見つけたけれど、一度はつまずいたけれどまた頑張ろうと思えた、自信が持てるようになった——

そんな生徒たちの変化をここにいる大人たちは自分のことのように喜びます。「今いる子どもたちを大切にしたい」。心からそう思える温かな地域だからこそ、生徒たちは小田分校で過ごした青春の先に、まだ見たことのない自分と出会えるのかもしれない。

この場所で、生徒たちが一杯学び、楽しむ姿がいつまでも続いてほしい——。ここでの思い出が多いほど、地域の人たちの喜びも増え、地域の未来も広がっていくのかもしれない。



運動会を楽しむ川倉さん(左)



見送りに駆けつけてくれた友達と先生



3年間一緒に過ごした仲間と迎えた卒業式